

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 JAPAN

圖解

量地指南後編

一

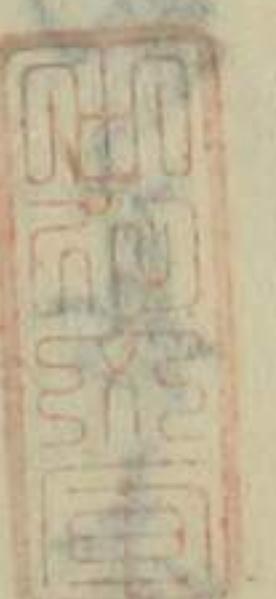
△ 1
726
1



鳳
號
卷

726

1-5



量地指南後篇序

嗚乎天地之道尚濶而古功
算數之功之所由起也 及古聖
人列之六藝豈可忽之乎 努力
南源昌弘為人博厚才敏
捷貌竟算數雋思疏之窮日之

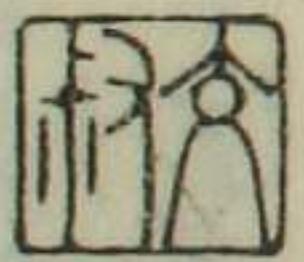
力一旦豁然以至妙矣於是
著量邊說三篇曰乃子母又
化後篇藏諸帳中未示人而卒
其子定興一日奉書踵余門
再曰烏人子者不陨家業之
有大矣故不續之上梓清子
以文嗣子首乃垂觀其書

搜討擣撫揜贖鉤隱縮
也乎又才約以所乎抄寫包羅
不世纖毫無遺宛然如示諸
掌上珍等數之至大而昌
弘之勤也何不與人共寫蓋
立之而朽昌弘固亦有也及羅

格諸氏之異同則決而得之
中非夫貪常嗜瑣者之屬
於有矚目覩其豐畧在是
与株一隅背馳乎此則伊
傷子昌弘昌弘既悟術而
疾既瘳學事而除可謂不

幸矣而其子續之以敷
回志余以嫿屬且嘉之
勤曰序之以輯之于首
于時寘改丁巳七月上浣

武陵丸山父敍叙



西河永忠成書



量也指南接編

九例

柳葉うるみを高む所の規矩全書。寛永の年
みもんの譽や柳。吾邦小僧半年の初極行の
起作もともの。之向人ニシテの後事。之と
ゆふの。也。詔書行。平が祖文林升昌行。是
て。之。終て行。次と以て。が傳極行。准接一
人の。は。と。ゆ。ま。を。ゆ。其。ほ。の。學。人。易。行。名。有。る
也。止。と。ゆ。だ。卒。生。を。國。小。蟄。行。故。不。ま。つ。達
度。つ。だ。す。又。強。忍。も。き。い。よ。也。多。く。と。く
も。云。多。力。を。も。体。以。て。る。身。を。立。す。る。

餘ども其妻の葉やく庵やくと傷みて嚮る
景やねぬ。あらま三生とあひて。こゝ後御用又
冊を移して。男湯と言ふ呼す。吾弟ハ昌言をきと
仰て。西後御用とたまはんへと

一
御經補々向東が遙。此の規矩全書。二三の門人
互に己う意を加へ。足りと重めて或の規矩元法を
名け。或ハ鉤股大元集と号し。又地理全書と號れ
ゆ。またに之御用十有八種。改考するを好む。安方
國益予家小庭の如の規矩全書の御用と損ある。其
御用之四つの傳。乃是大元全書。紙開人授書
墨書き。補ひ無事。さへ持て。贅言鄙俚と歎へ。之を
御用。是景やねぬ前後御用と記す。御用書

一
みえ傳。おほき事。御用。御用。御用。御用。御用。
シカリ。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。
近世。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。
人。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。
人。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。
人。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。
人。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。
人。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。
人。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。
人。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。
人。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。
人。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。御用。

をりふ者。傍かくらむとふめり。昌弘葉すらみ
主事更ふ達。近年世列の筆者
輿代の書を續りて。手稿はもととを
聞きぬ。鳴呼の体をつゝも。支那もとくち
御神。且天械の制。寧むかへば。是と用ひて
もとふ方舟也。尤ニ械を僻して。四者
角。故に是は量也近遠也。而後から誠
主事。又其の通譯也。すと本意するに附り
仍々試手。之法を例へ。量也の本脚附の大異とあら。

一
量也の脚附前後爲御名。總て一百九十三原

前編五十八條
後編百卅五條
是をもととす。亦も傳本輿の御も
す。放て他も需じて。既お船頭のち城園
傳。北極う。試遠里は勘。一本の御。極ほの無常
游流も。大幸く御て御て御と。所すと
ども。坐づけ御。御拘つて。御ば掌の内ふ
船て。生く。と。詳をと。本より。土トモ
園圓要用脚傳。小説極候の傳。高堂翁は脚
傳。理圓家脚の傳。流儀通經の傳等。古御
脚。御脚。證の底蘊をもとと。傳ふ。是併御
を。諸弟子達。園圓の御。あとと傳ふ。御
御と。と。化あれり。化あれり。今年御と。御と

旅とあく。勿通。是すが御と申す。御解す
る所河と。乃へ、鷗あらへ。人情豈と妙ひ
うそほひてからり

寶曆四甲戌夏六月

村井蘿道子昌弘識



量地指南後篇稿之總目次

卷之一 雜品解 術名二十一條

規矩全書上卷術名

規矩全書下卷術名

別卷術名異

算法用捨

盤繼用法

己尺之用

舊器之號

磁石切要並見込様

指針塵 隱針塵 順逆振様

高下振様

振分 隱銘

逆磁石 忍磁石 立覽器

小丸之用

中丸之用

大丸之用 並方雜圓盤

元器之用

分度之用

渾發之用

方尺之用 並試定木

折紙之用

隨川器之用

虎法器之用

圖寫器之用

間竿之用

卷之三極傳解 術名二十七條

夜中間町

船路之考 四術 並船路器械

遠里之考 並遠里之矩

北極之考

真矩之繩二術

地形高低三術

極中不中片極

土手陰知木高二術

高指何分

向指真矩二術

自服指真矩

天守櫓知居所

用山表裏

寫山形

責山形

求山斜登

知山厚

卷之四筭勘術 術名二十九條

筭勘之辨

器械之制

町見術名

四町見之辨 站平町見 上町見

下町見 向町見

廣遠町見二術 亂面町見

知遠近

知廣狹遠近 並扇矩

知山廣程並直立

知物高並別術

知谷深

知山廣程並直立

知水深二術

折竹術三術

量流物

量行程

量兩高下

卷之五渾發術 術名三十二條

渾發功用

算理渾發並三四五之矩

圓理二術

量地指南後篇卷之一

勢南 處士 村井昌弘編述



雜品解

一規矩全書上卷術名

前傳本傳とも

- 空眼註精眼法 ○分數註求開地 ○度量註定目的 ○見込註視法
○平町註左右正開方 ○兩斜進退註左右斜開方 ○前後進退註前後當
○不動知遠註規矩大元方 ○隔沼河註正當兩開方 ○極中不中註前後當
○知雙註開方 ○寸尺用捨註品解雜 ○算法用捨註雜品解 ○三四五矩註渾一註
○直極註量盤 ○知山高註谷心量高方 ○知谷深註量深二術方 ○知

量地指南後編稿之總目次終

總計五卷術名百三十五條

- 徑矢弦二術 坪詰 步詰二術 錐形
平凹遠近 斜面遠近 正面廣狹
斜面廣狹 極諸高下 知諸高下
極諸高下 地口異 水月
水月 地口異 摸望之間町
地口異 天口 覓先
天口 樣脚 樣體
覓跡 方鏡 白浪
草結 天口異

- 兩山差註兩山月知方 ○ 知谷幅木丈註明山同知方 ○ 知地形高下註極
- 指望之間註無的定間方 ○ 間竿打樣註罟 ○ 座而地取註暗指
- 直之繩張註極傳解 ○ 陰之目的註二地重開方 ○ 知前面廣註正面斜開方
- 夜之見樣註極傳解 ○ 磁石振樣註器用解 ○ 磁石見樣註器用解 ○ 城
- 圖註四知一開方 ○ 國圖註極傳解 ○ 遠里積註極傳解 ○ 北極積註極傳解 ○ 船
- 路積註極傳解 ○ 道具之制註雜品解

右上卷術名の目録なり。是を以て大畧量地術尽せりといふ
がも。古來其師範ゝる人謾小秘奥と傳人々と恊えて。教海
の式小前中後の三等となつて。同術と粗精與三回小説習也
と見へり。此旨予が取用せざる處なりとども。姑く古法乃

一規矩全書中卷術名

別傳

- 書面小隨て此小抄出す。覽者此趣を察をば
- 平町註左右正開方 ○ 前後進退註前後當開方 ○ 左右進退註正百前後方當
- 不動知間數註規矩大元方 ○ 大真矩註神速大盤方 ○ 隅沼河開註開方
- 極中不中註一知雙開方 ○ 中不中片極註極傳解 ○ 寸尺用捨註雜品解
- 算汰用捨註雜品解 ○ 三四五矩註渾發術 ○ 知山之高註谷四重高方
- 極直註立盤方 ○ 進退之山註量高一術方 ○ 兩山之差註兩山川知方 ○ 谷底
- 知地幅同知方 ○ 指望間町註無的定間方 ○ 坐而地取註開指方面方
- 間竿打樣註器用解 ○ 直之繩張註極傳解 ○ 蔭之目的註地量開方 ○ 知

前回廣ひろひろ註正面

斜開方

○前面向用

註兩知

一開方

○夜中見様

註極

傳解

○摸

城形じゆうけい註極

傳解

○摸國郡もくこくぐん註極

傳解

○現差用捨げんさようす註雜

品解

○凡例之格ふりやくしき註雜

註

品解

○目的目積めのめづき註先量

精眼

○分某發法

註雜

品解

右中卷術名の目次大畧上卷の標目小同。是教諭の法
小前後精粗の別ある故なり。取も予が取用できる所より
といても暫く古法の目次小隨て前篇小論せざるものと
後篇小述ぶ見る者贅言うて訝ることなれど

一規矩全書下卷術名

極要ごくよう

○舊器号きゅうきごう註雜

品解

○圓知平町えんちへいぢょう註四初

前後方

○前回進退

註正面

○正開方

○真矩繩張まんくじよう註極

傳解

○真繩真矩拔ましよくまんくばつ註極

傳解

○前面一開

註斜面

○正開方

○沼河真矩筋違ぬまくわまんくじんたい註正斜

雨開方

○沼河筋違重ぬまくわじんたいじゆう註正斜

雨開方

○土手陰知

註斜面

○指高

傳解

○向指真矩むこうじまんく註極

傳解

○同從脇而指之どうじゆくわいじ註極

傳解

○指高

傳解

○何分なんぶん註極

傳解

○山谷一開さんごくいつかい註山谷

數知方

○真沼河まなまくわ註殘子

一開方

○山上谷

一開方

○底知木高そこちきゆう註山谷

數知方

右下巻術名の標目も又上巻中巻の術名と同様物
多く。是も講習ふ精粗あるべから。勿論予が取用せざ
所なく。つゞく。前篇小記ももとば。後篇よづ
て右小云が

同流三四書之術名異

- 用合度知高註極○山用表裏註極○責山上同○鴟山
- 形上同○知山厚上同○天守櫓知居所上同○向真中日陰指上同
- 聚不盡上同○求山登垂
- 聚不盡上同○求山登垂

右同流三四書の術名異ハ好事の者の所為にて一向取用所ナリと云ふ。前小云る意味ナリ。又小是小贅す

別卷術名異

- 寸尺之用註雜品解○已尺之用上同○折紙法註墨用解○見盤大成註雜品解○盤功法上同○盤繼法上同

右別卷術名異ハ往々前卷の標目と同じども其名異なりをりつゝ是小贅す

一本術多名異

- 圓理渾發註渾發術○算理渾發同上○歩誥同上○坪誥同上
- 方錐上同○平錐同上○山形上同○菱形同上○片狹上同
- 徑矢弦上同○渾發之衝上同○遠近平町上同○遠近筋違上同
- 前面廣狹上同○望之間上同○高下上同○極高下上同
- 天口上同○地口上同○覓先上同○覓跡上同○様脚上同○様體上同
- 白浪上同○水月上同○草結上同○猥獲上同○閑扇上同

○方鏡ヨウキ上ジョウジヤウ同

右一本術。術名異ハ。規矩全書二三の書の目次小隨て是と記す。見者標目の混雜を訝るとナリ。大凡此六件の條目百三十餘前篇四十六條後篇八十四條ハ。規矩全書。其外規矩術同流三四家の書を以て。校量もて、各均して之也。右余とば不芟不足をばうしを補ふ。猶三四書小洩るを云々とは不益の目次といても捨ずて。此後篇五卷中に論す。是學者をして他の異目うりても畢竟無益の説ナリと知り。又為なりと察さべ

寸尺用捨

凡町見術かねむて。里町反間を量るハ。皆渾發の事也。寸尺小拘ることナリ。然ども寸尺ハ里町反間の基本ナリ。敢て

捨るを小りた。故小寸尺用捨と云ふ。用捨とは用ふ非す捨るをあざる。謂ナリ。其理と委く云ふ。曲尺もて量時ハ厘毛以下不尽小出來て眼力に及ばざり。渾發もて量るをいたハ。審算なら。故ニ割餘と云ふとな。故ニ渾發を以て遠近廣狹高低も小計を知る。と町見術の常と云ふ。小とも丈尺長き物を計ふ。至てハ渾發の事。又迂遠了ちて曲尺を用て量るの速なるより。茲と以て此条を掲う。

算法用捨

算法用捨とも又寸尺用捨の理ふ同ド。町見の古文業に於て算法を用ひずとも害ナシ。似く。然ども算法も數量の根元ナリ。捨づきにあざ。因て用ふあざ。捨ゑり。假令ハ渾發を遠程一里の開除を求る。其一里

と三十六小割さくを一町まちで三十引。殘のこり六町を三百六十間まつと知しる。此内うちと十間じまで二十引。又殘六十間まつあるを。一間じま三十分さんじゆぶんを三十小割さく時ときハ一里りの三十分さんじゆぶん一ハ一町十二間じまをうめのごく知しも渾まん発はつをハ迂遠きえんなり。算法かぶんをハ三十六町じまちを一町まちで三十引。殘のこり三百六十間まつを三十小割さく除のぞる時ときハ即そく十二間じまと知しる。是に初はじの一町まちを加くわすて一町十二間じま也。この大業速おほやくうかる故ゆゑふ至極しげきハ算法かぶんぽ捨すてばらばら

現差用捨

現差用捨げんさうようすてと云いふ。此こふ於おて毫厘まいりの違ちある處ところハ。彼かれが至いた丈尺じやくしゃくの差のぶとなるものものなり。又此こふ於おて丈尺じやくしゃくの違ちある處ところハ。彼かれが至いたてす分ぶんの害がいとなるものものなり。是を用捨ようすてと云いふ。尤止よどと得とくれ法ほうなり。其害がいとなるものものハ盤面ばんめんの墨線渾まんせん

発はつの量口圖形りょうくひょうけいの摸寫もくしゃ等とうなり。其害がいとなるものものハ里町りまち及およ間まの增減ぞうげんなり。里町及およ間まハ假令かうりやう開餘かいよを求めると間數まんすう其目印もくいんナリ。十間じま一尺じゆナリても。又ハ九間じま五尺じゆありても。共とも小十間じまと用もちて深害ふかがいナリ。況郡國くわんこくの圖ずナリ。其妨うがいナリ。然しかども止とどと間ま六十一間じまを俱とも一町まちふ用もちるも其妨うがいナリ。然しかども止とどと得とくるもよして好すきむとくふよ及およぐ也。總ぜんて細密さいみつのときは差のぶを用もちい。疎遠疎遠のときは差のぶを捨すてるをりす。

凡例定格

古法こぽ小云。凡例定格ぼんりとうぎやくと云いふ。小差のぶを論べざるをりす。特とくの

詳くわたるとは左ひだり小記こきす

糾寸尺則不論厘毫

糾寸則不論厘毫

糾寸則不論厘毫

たすくすとくまへ すろくせじやうやまと
糺町數則不論丈尺

遠則捨丈
近則捨尺

てまつ
糺里數則不論たうり
てまつ
糺大里則不論町里まち

遠則捨飯
近則捨間
六里捨里
小里捨町

分其余發法

古法云。分碁発法。とひよハ。今用る間町里の木をりよ
となリ。古云。粟以小粒発分。即_チ発寸尺間丈町里

也云云

丁間

豈
今ハ六尺ち
八十間ち
古床

今ハ六尺九寸六十間古法三千六百歩を以て田畠の一町の積と其外画を以て道規の町と云

里

地周

九万里但唐路ちう和路面一万里五千里也
是大塊の一隅ちう
二万八千里ちう但東西の貫也於南北
三千里の有延故為鵠卵

1

也
也

地鹿

卷之三

益大書

小流

何ぞ

母術

切用

の法

小山

平

割合

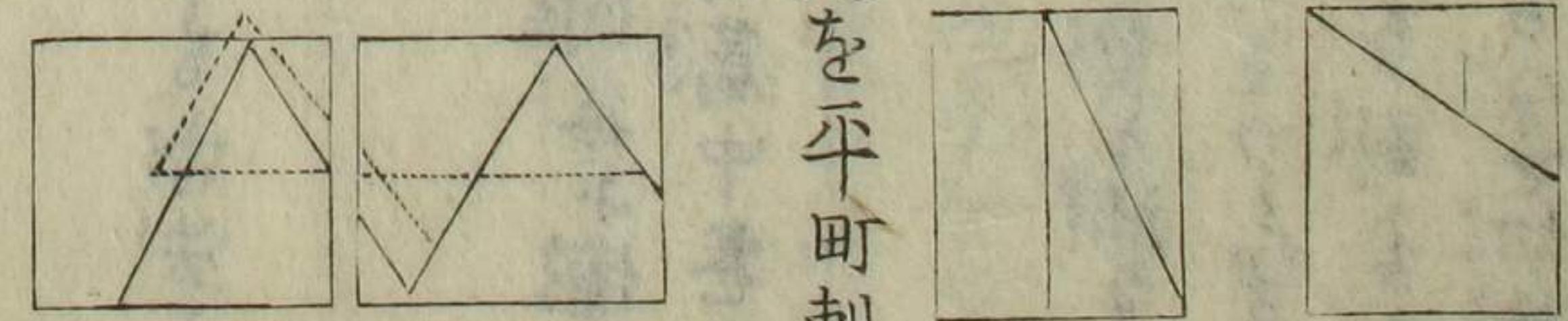
卷之二

卷之三

三と量るから。是山谷割盤の法。又平町 山谷
筋違等伐勤ると。開場小至つて見通 割盤
小間りと行き巴。盤の面の角を見通す
あくも成難し。其時ハ盤の向の端條會 平町
にならずして。向も口出來る故。手前より 割盤
真矩を取て盤を割て條會を作り量る。是を平町割
盤とす。

盤繼用法

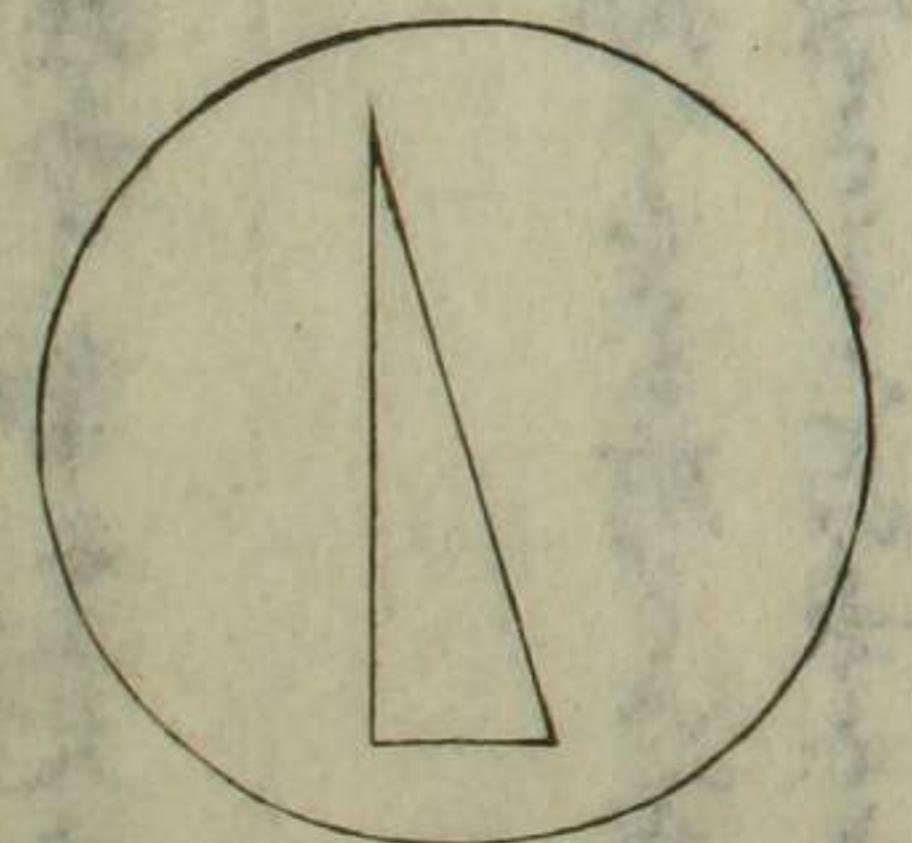
盤繼とす。遠境累隔などの業を勤て盤一面ふ
摸し足ざる時。外の盤を併せ繼て用うをす。す
前篇やく予が所謂併盤とす。是を前條
述る所の割盤法。又此條ふ云處の併盤法共に



前篇小委く出たゞも爰に別傳の條目小秘訣たり。記
分故小贊言を述べ學者の問を塞ぐ

不拘器物

器物小不拘とハ。町見術の諸器物有合ざる所。何ふかぎ
らば外面白。器物を用て見盤定木のべし。其用を
かげとりてお。或ハ定木あつて。見盤ころす時も。膳
盆の類みても用ひ。但圖のべく其中みて見込見通す
あり。或ハ盤あひて定木ころす時ハ。糸と
針とを用ひ。或ハ忍等を求る所。器
物小拘る時ハ。萬物障となつて。求がに亦
器物を放る意あり。時ハ其用全かづ。その



地ふこれあら萬物を即道具に用るの理あり。常ふ工夫する。是う爲小牧用器なり。

寸尺之用

寸尺の用とよハ大凡寸尺ハ規矩術の拘りざる所とい共又用る所たり。今茲すくハ寸尺を用ゆべしもとつて也其故ハ一本術用法小云く。一尺と五寸ぞ。種の口と四倍すとよなり。意ハ二尺を五寸とす。方尺二尺を五寸の長さ心得。種の口を四倍すとハ渾發也。種を夾むる口を四倍ふす。是とおもは。是と方尺も渾發も俱ふ同寸分ふなる。二尺の方尺を五寸とす。時。種と夾むる口二分あらば。是を八分の口ふ作。二尺を計ること。理の當然なり。但まもとより先傳法也。門弟子とて愚するもの

左渾發の口をひらくにて量をば量もやうと故にやうと縮るなり。其徑ふ二分の小口とて長を方尺二尺を量。かば厘毛に至て治定の分らざるふ依てナラ

己尺之用

己尺の用とよまづ己尺とハ一己の身体を悉くす尺と考むとなら。意ハたゞ己が三跬ハ一間たゞハ己が腕尺ハ二尺五寸がよど己もが指尺ハ五寸。たゞ己も跨尺ハ四尺八寸。たゞ己もが一尋ハ五尺二寸等。兼て誠置をり。其外空眼先知乃類をひき。而后作法のじく。堅木をなして其業を發行す。是一本術大要至極の全法なり。

圖寫屈伸之用

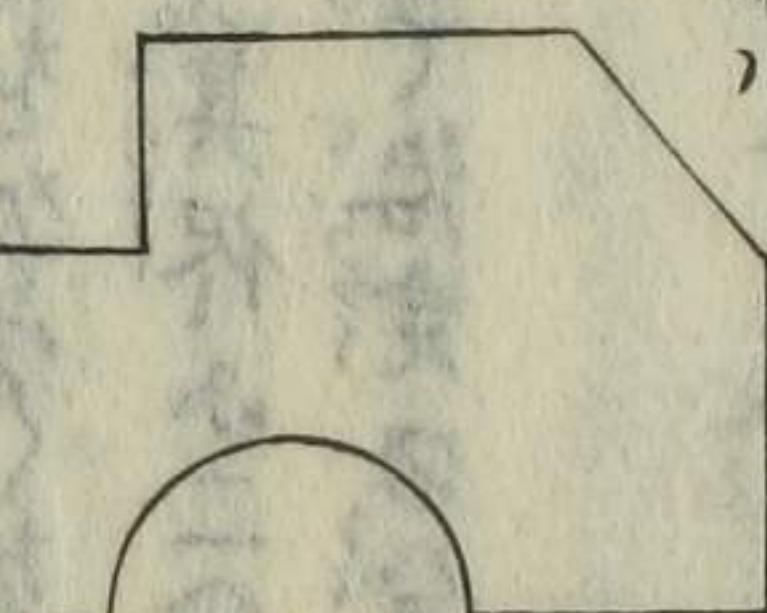
圖寫屈伸の用とよハ古傳云分間の圖を屈伸する所にハ

尺を用るなり。角寫と意順の矩を用るなり。蓋至極の角寫の秘傳なり。或ハ三分一。或ハ四分一。亦ハ何割等増減ハ寸尺小拘すて。渾發をもつて寫すと速うかり。但其がち手にて働く。時宜小よりべし。口傳云云。

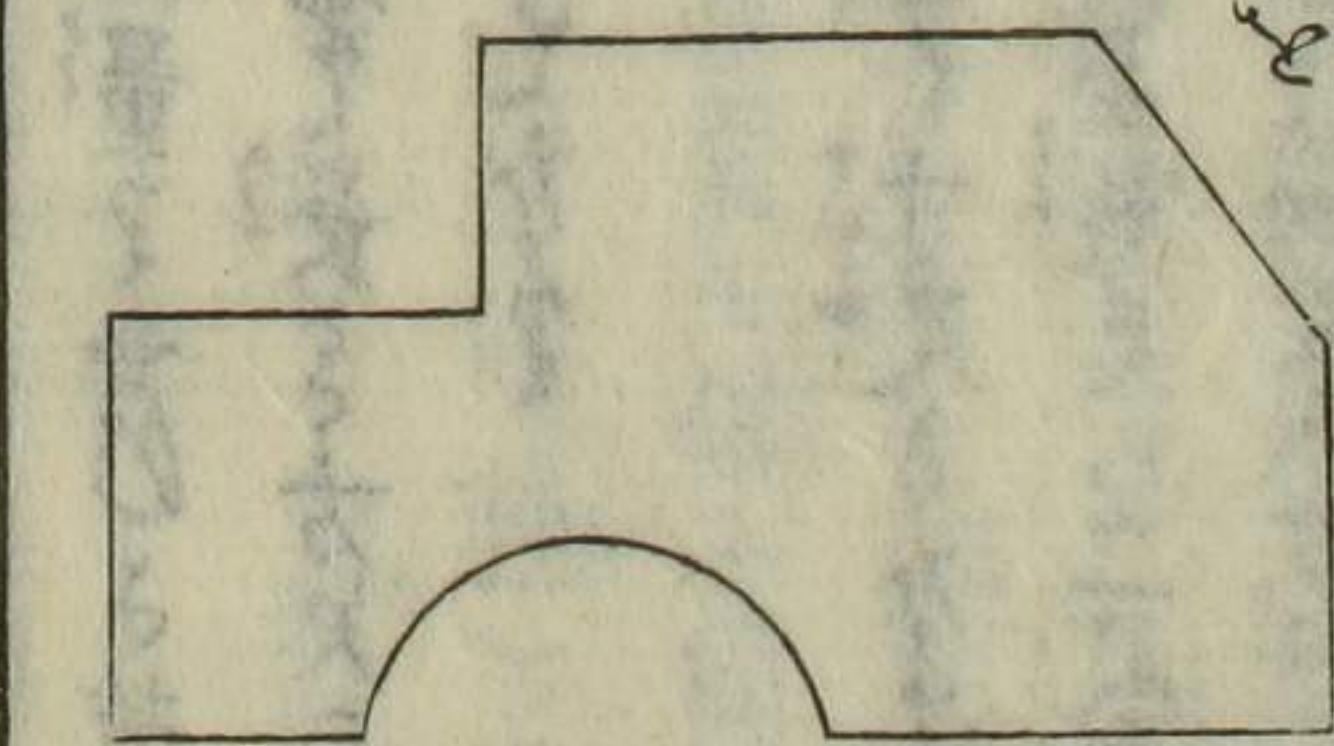
又或傳云。國圖城圖等と延縮するよハ假小紙の方をりもひ分度を以て。方角と地幅を求めて野帳と仕立て寫取る。亦日本之國圖等の矩小合ざる形ハ

假小步割を用ひてうけしる

事うら。よく口傳あり



三割延之
寫也口傳



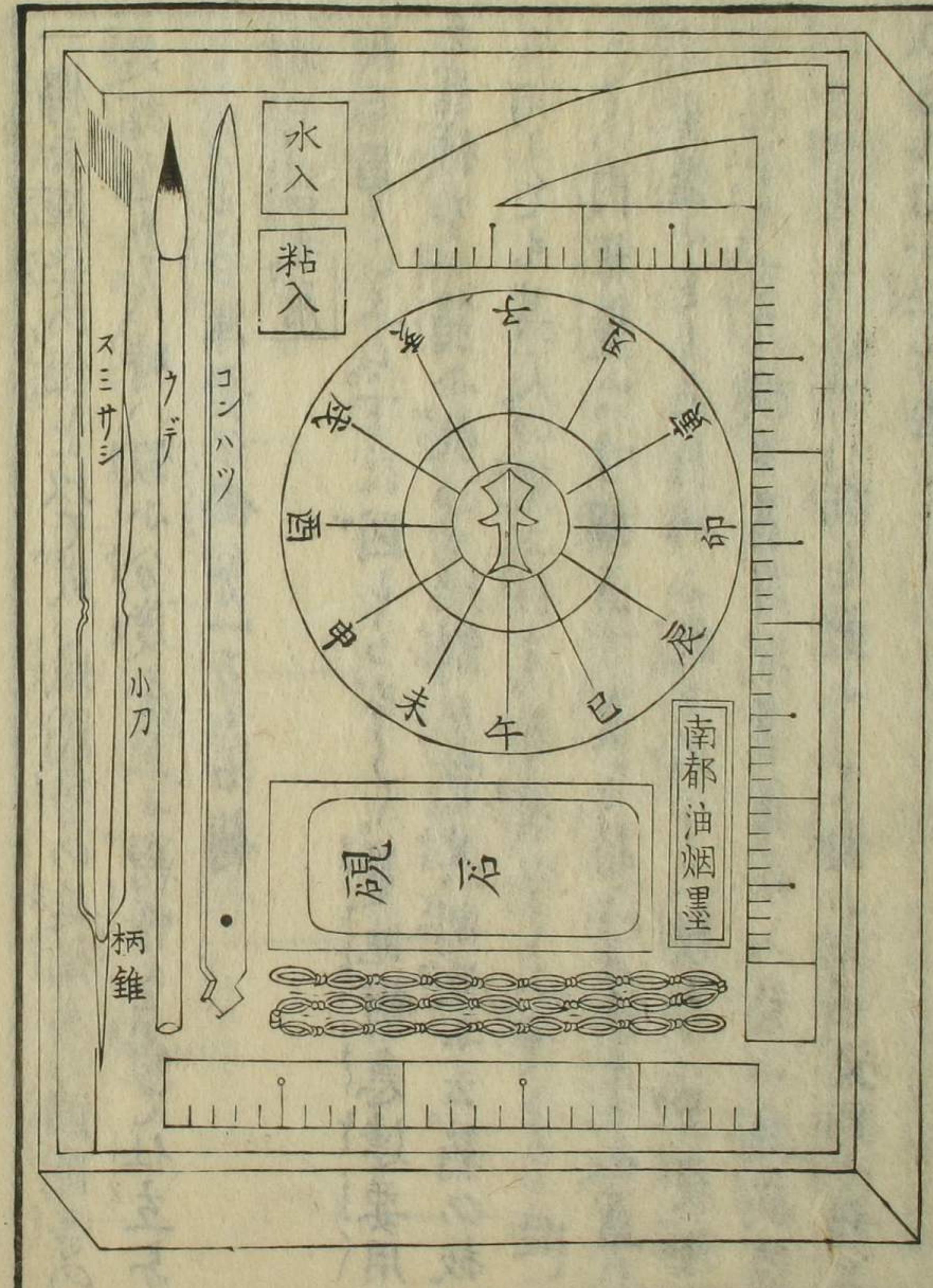
一傳云。渾發の働くを以て。或ハ城圖等の延縮亦ハ國圖等の延縮をなし。時ハ假小分度を用小野帳を得て仕立ふ。各渾發の働く第一なり。口傳

收用器之用

收用器とよぶ。下に図。量地術急速要用の器械を一箱ふ收し。其制法ふ云。箱の板を何とも其人の望ふ任す。春慶ノ如く。塗く。佳大さハ内矩豎六寸横五寸。蓋を指入シ。不ふく。也。蓋ハ即量盤小うちも。此内小收ふ。十二種。あり。分度矩渾發小丸。方尺。横手墨。芯硯。墨筆。水入。黏入。紙裁の小刀等。小刀ハ柄を銳みて錐ふ用。又別ふ錐と入ふも心ふ任し。

舊器之號

- 貨度轄輪
 - 貨彈覽天
 - 圓盤
 - 星刻
 - 以寸多羅比
 - 羅宇坐
 - 漏墨
 - 復寫
 - 方圖器
 - 星尺
- 十六方位の磁針
新制の里坐急均
摸国の器といふ
- 同上
- 星上圭とも名くとす
船中の器用とも其法知りど
十六方位の磁針
新制の里坐急均
- 摸国の器といふ
- 同上
- 天尺を量る器といふ



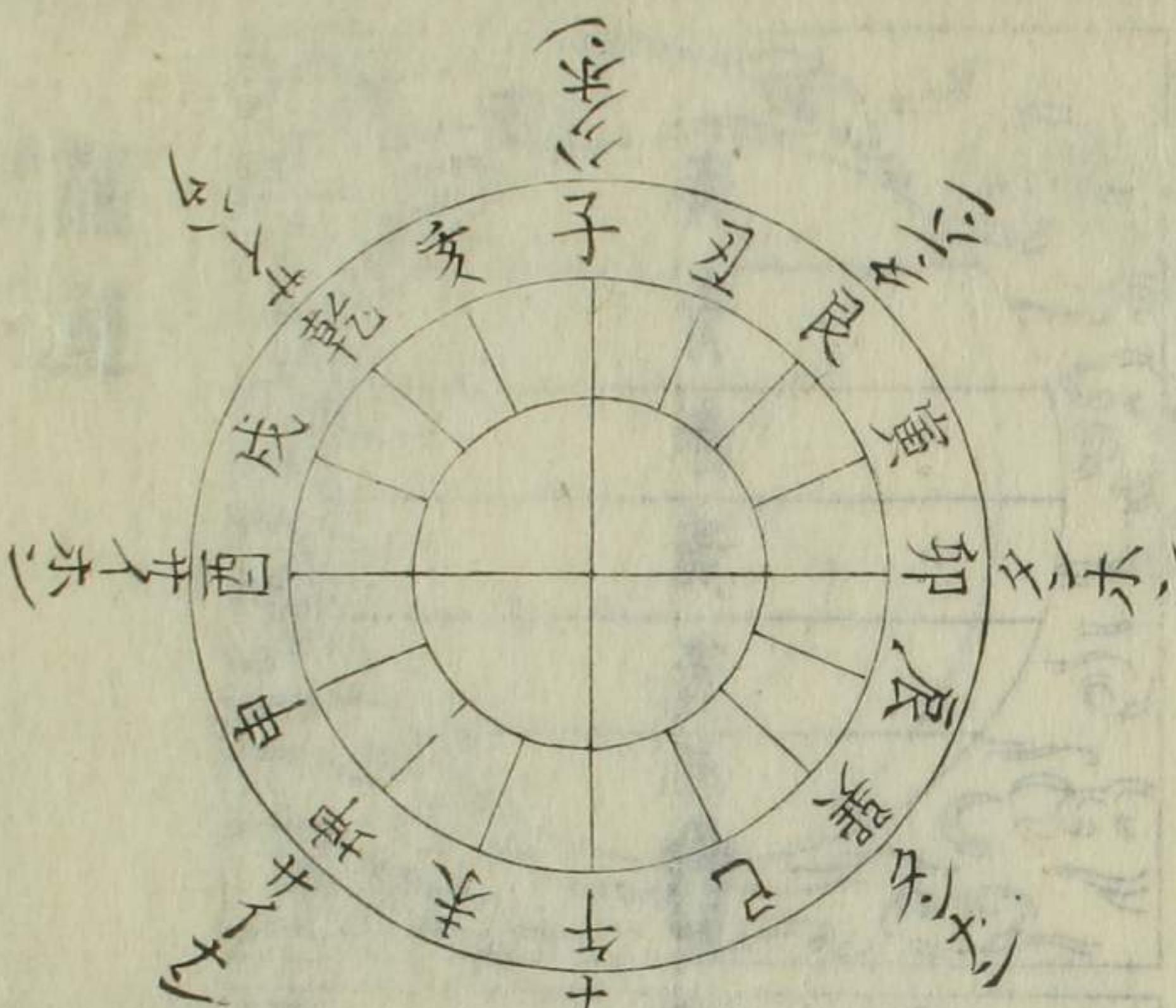
○日刻

日影を量るの器なり

右十二種ハ粗予が見聞する處なり。其余の品阿須多羅以
与加呂士惠牟須加呂士加苗太加路兜渾發寸天経天緯標
木など云々のり。其制法と不辨故ふ圖せば又羅經方針指北
方と云。古小所謂羅宇坐ともいへく。吾邦當時用る處の磁針
ふ同じたり。抑此術吾邦流布の始粗此旧器物を用ると有と云
ども異邦の人の其便利と尽すがゆゑとわざはす。是より因てあれ
ども其器物廢れ。吾邦今之の量地者流今に於てハ旧器の号とども
知者少し。此故小初學の者往々其器物名と聞傳て怪しそうと
けんか。其疑惑と散じ。其用法の失セリと知らん為に爰ふ図
を著つて當流の學者小示す。

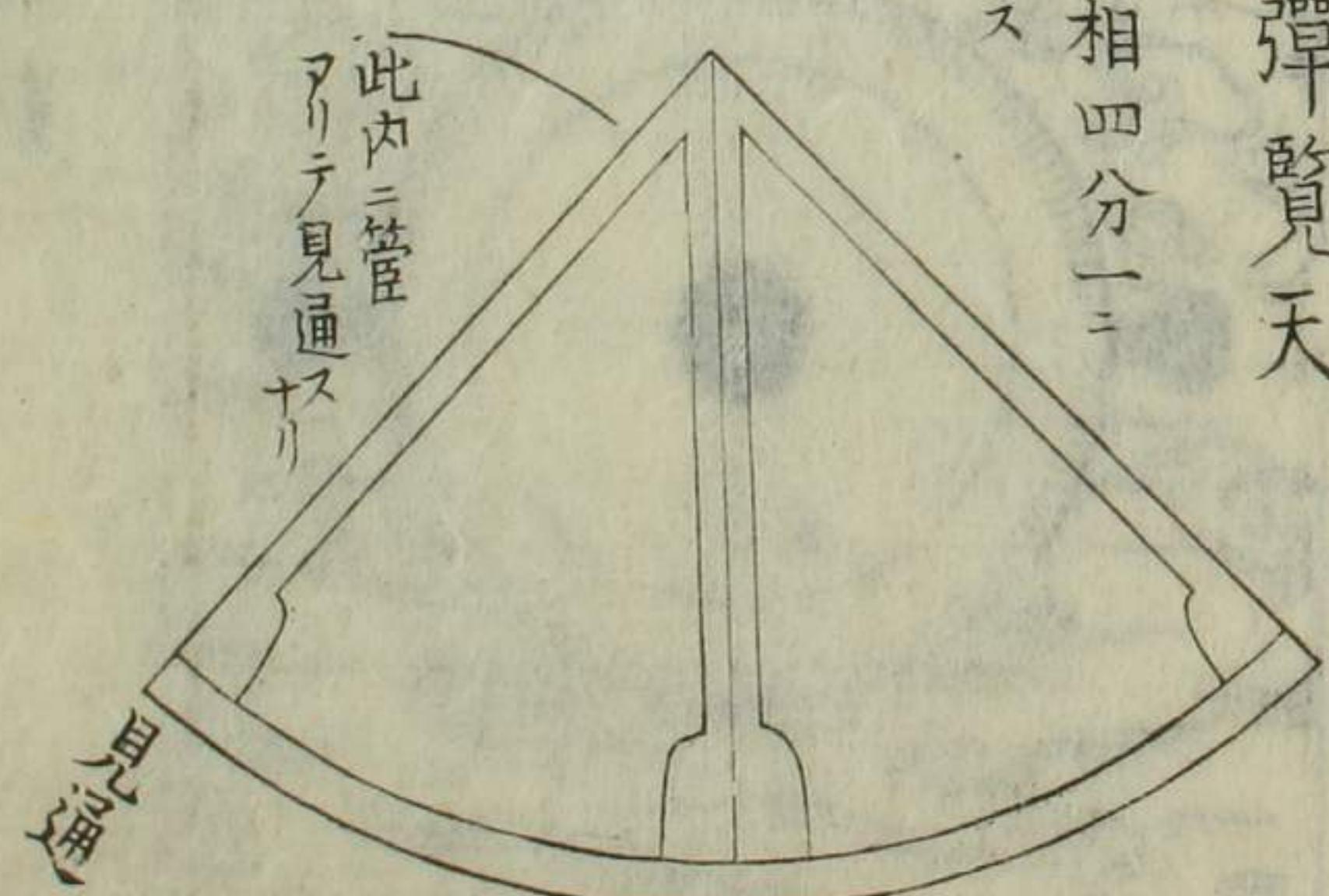
右の器械其名ゆゑといへども當時こうを用ひず

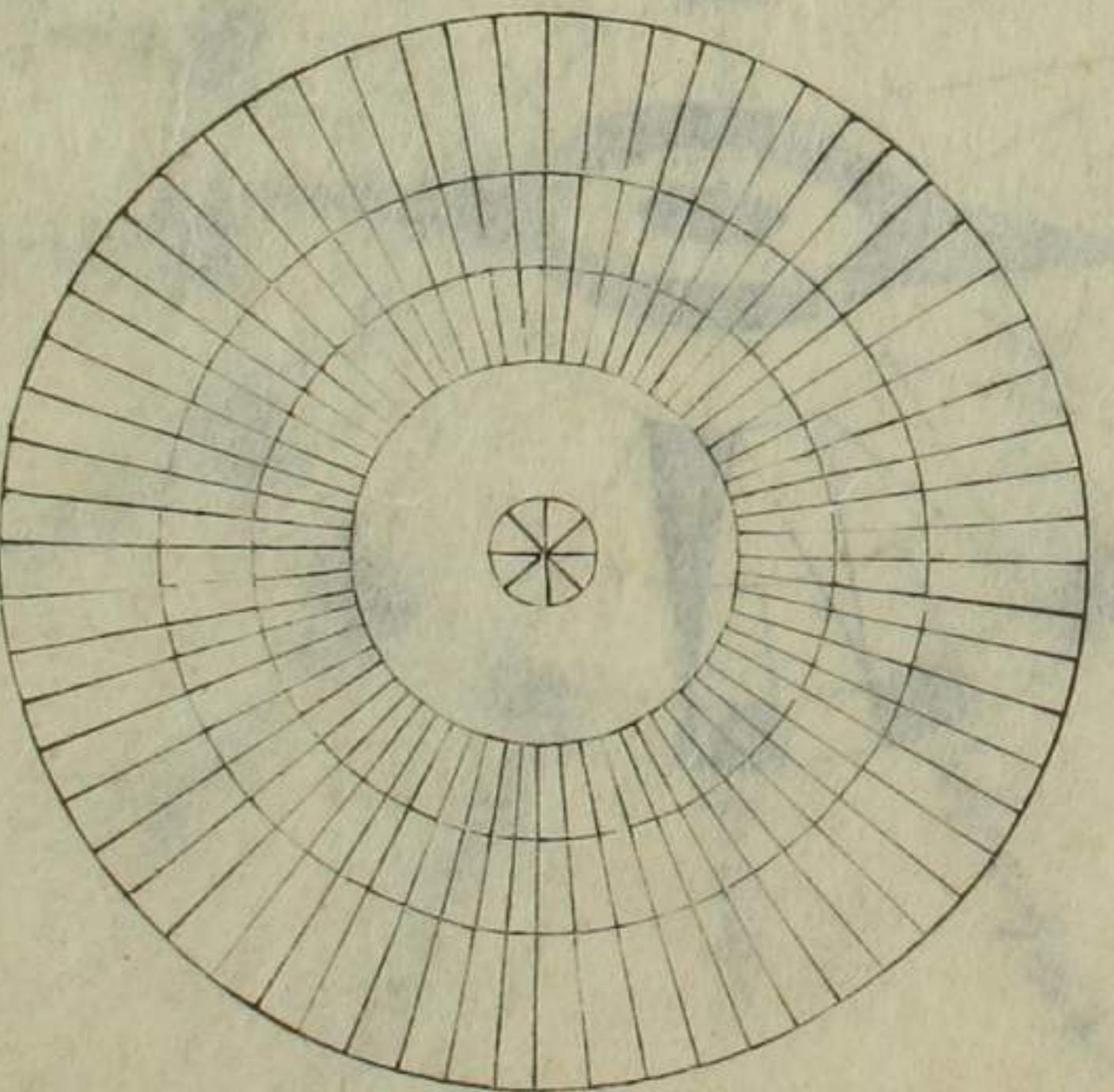
貨度轄輪



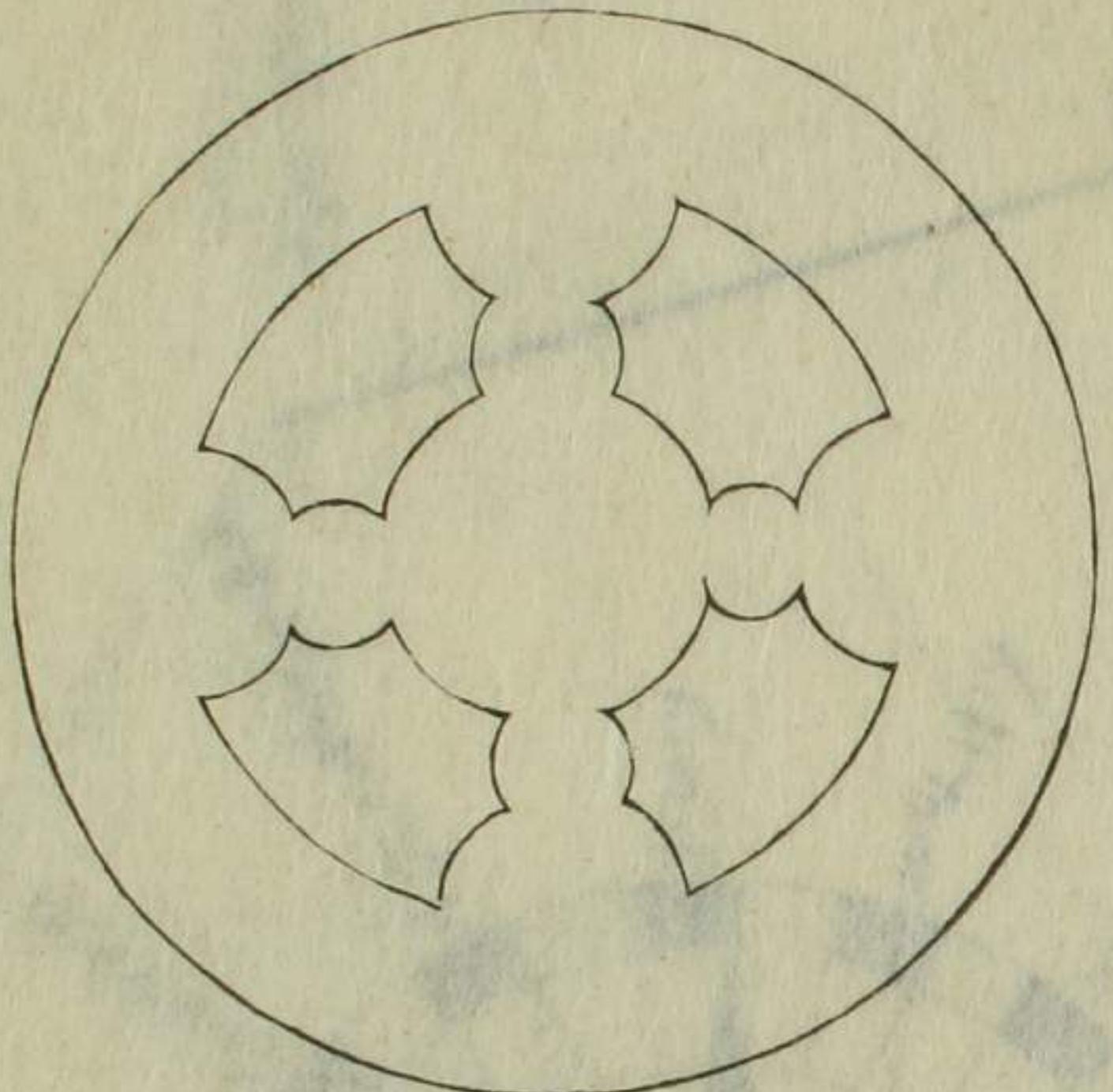
貨彈覽天

四相四分一ニ
制ス





後寫

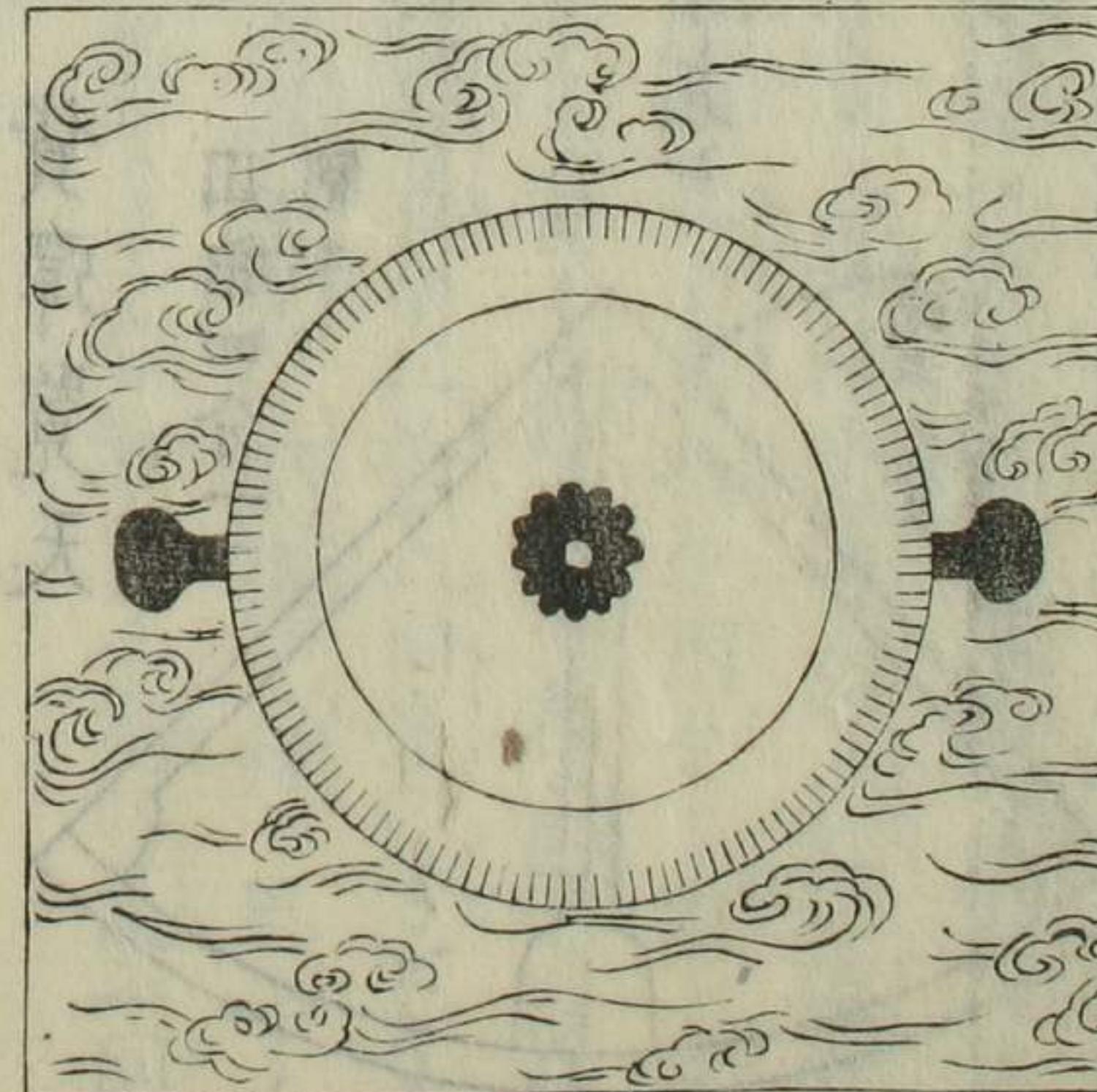


以寸多羅比

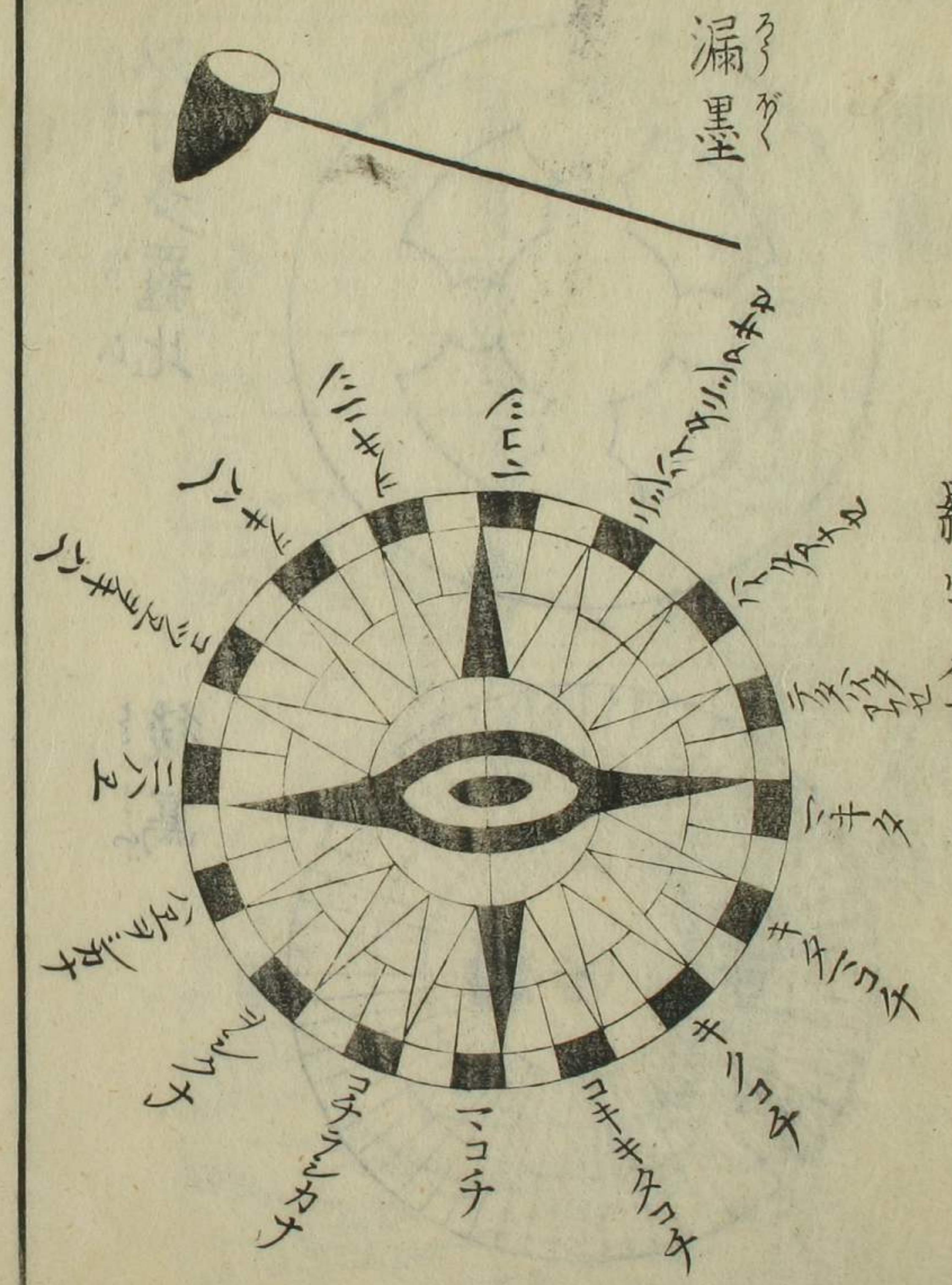
圓盤



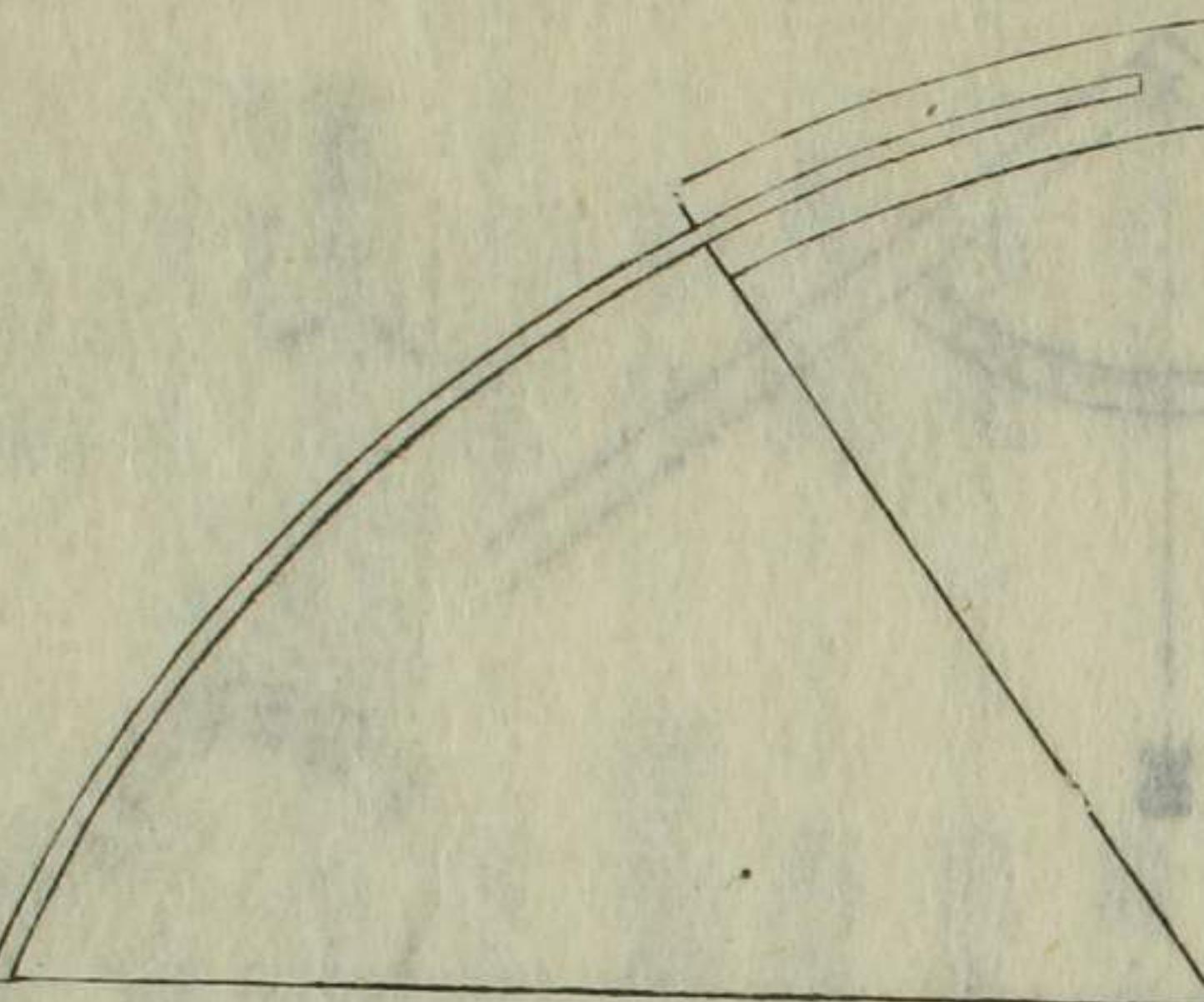
星刻



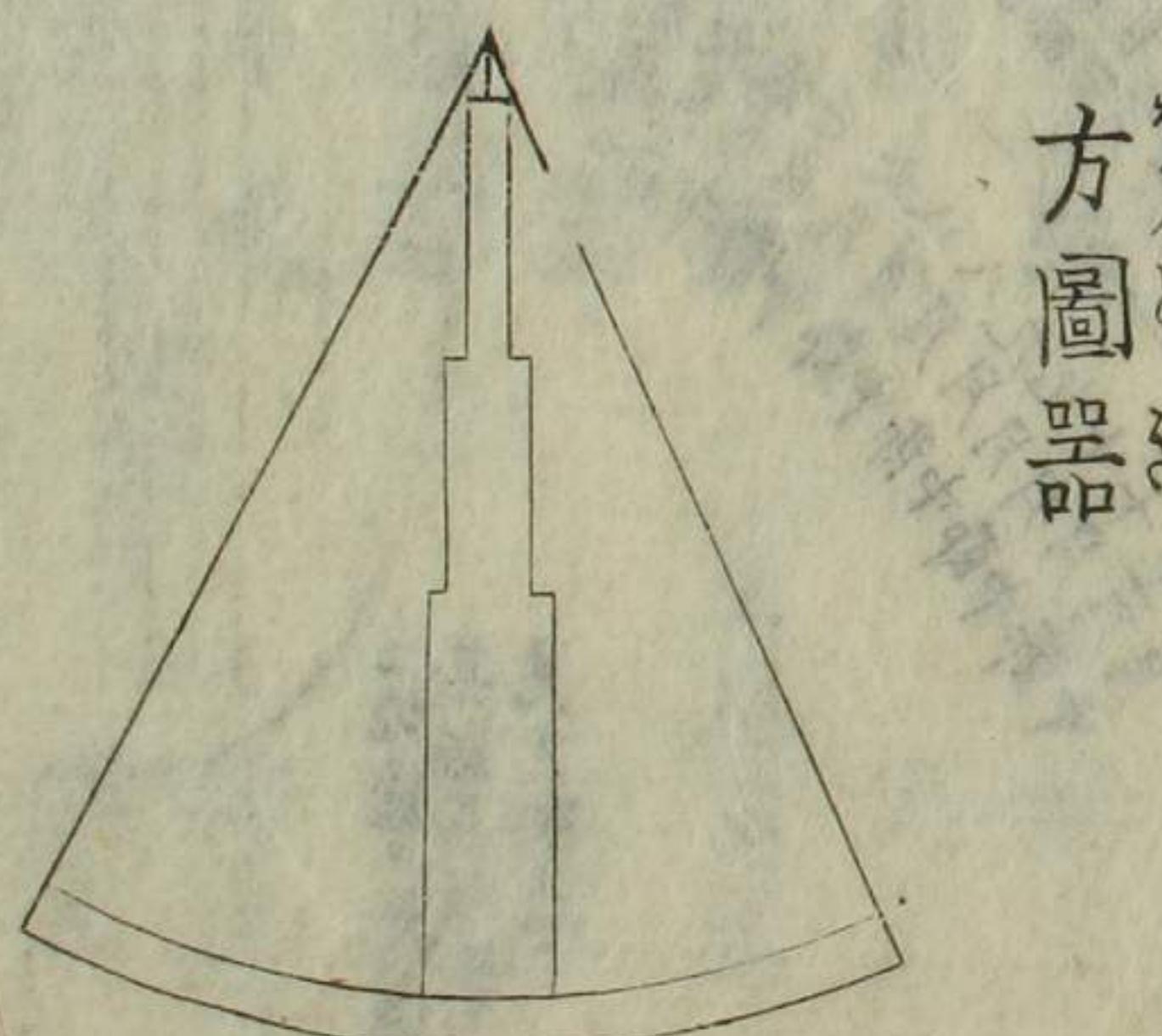
羅宇坐



漏墨



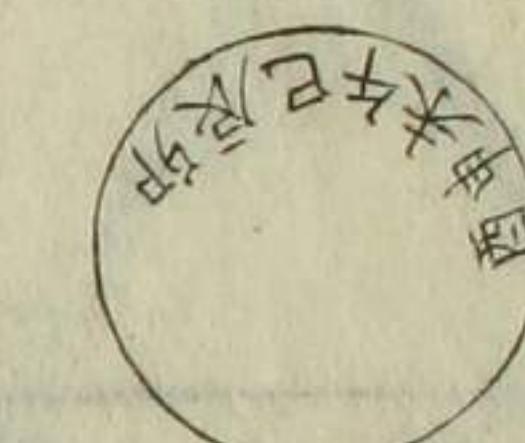
意順規



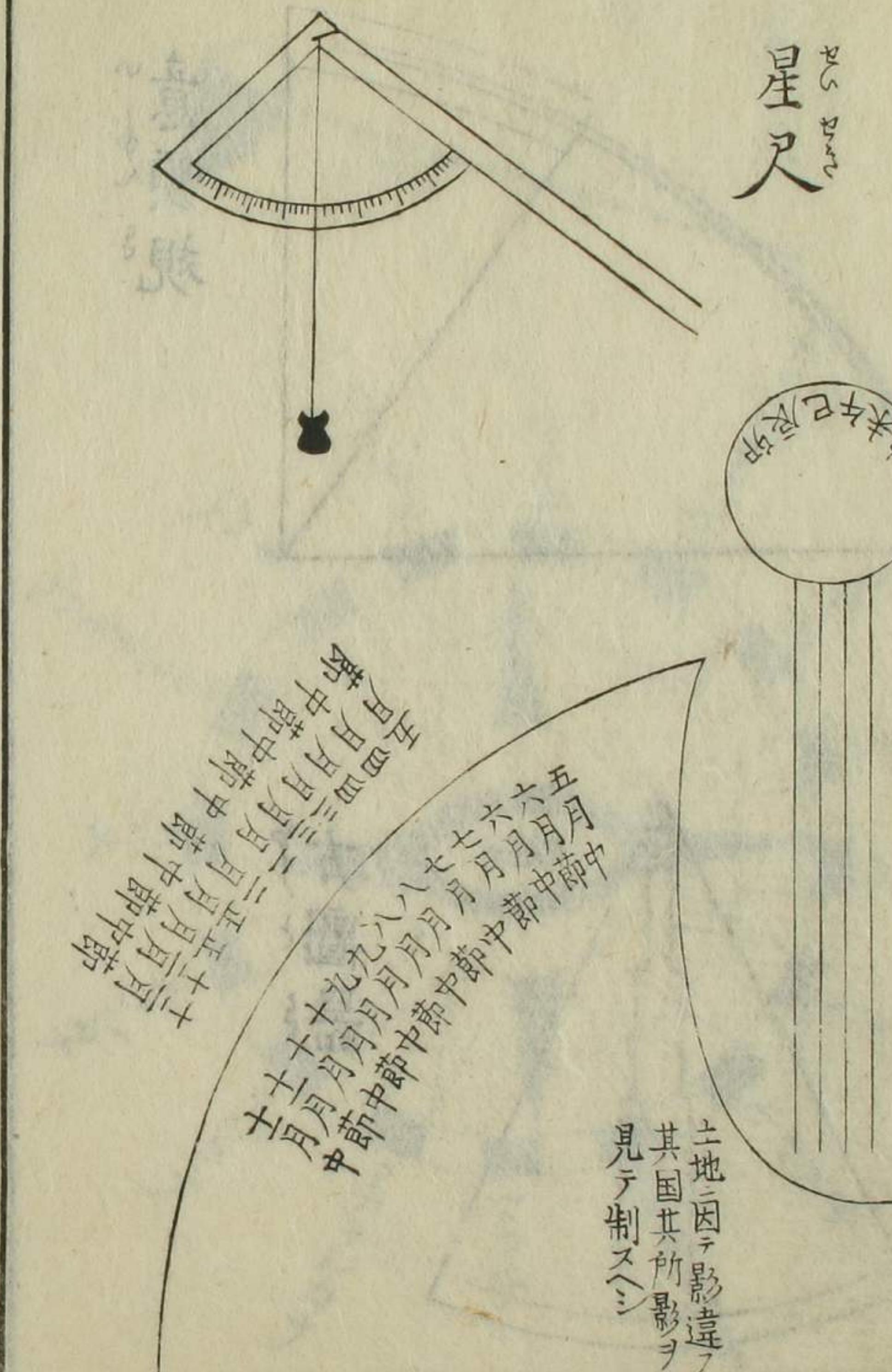
方圖器

日刻

星尺



土地因テ影違
其國其所影ヲ
見テ制スシ



新器之號

○渾發

出前編又墨用解

○垂針

同上

○釣玉

同上

○定木

同上

○錐繩

同上

○管棹

同上

○標櫛

同上

○元器

同上

○恩磁石

五観墨云
隱銘尾云

同上

○臺金

中丸
五観墨云

同上

○分度矩

同上

○圖焉器

同上

○隨川器

同上

○大丸

四盤瓦

同上

○虎法器

方四盤瓦

同上

○方尺 並試定規 同上

○折紙

同上

○火粒

出極傳解

○遠里炬

同上

○度數

同上

○水平

同上

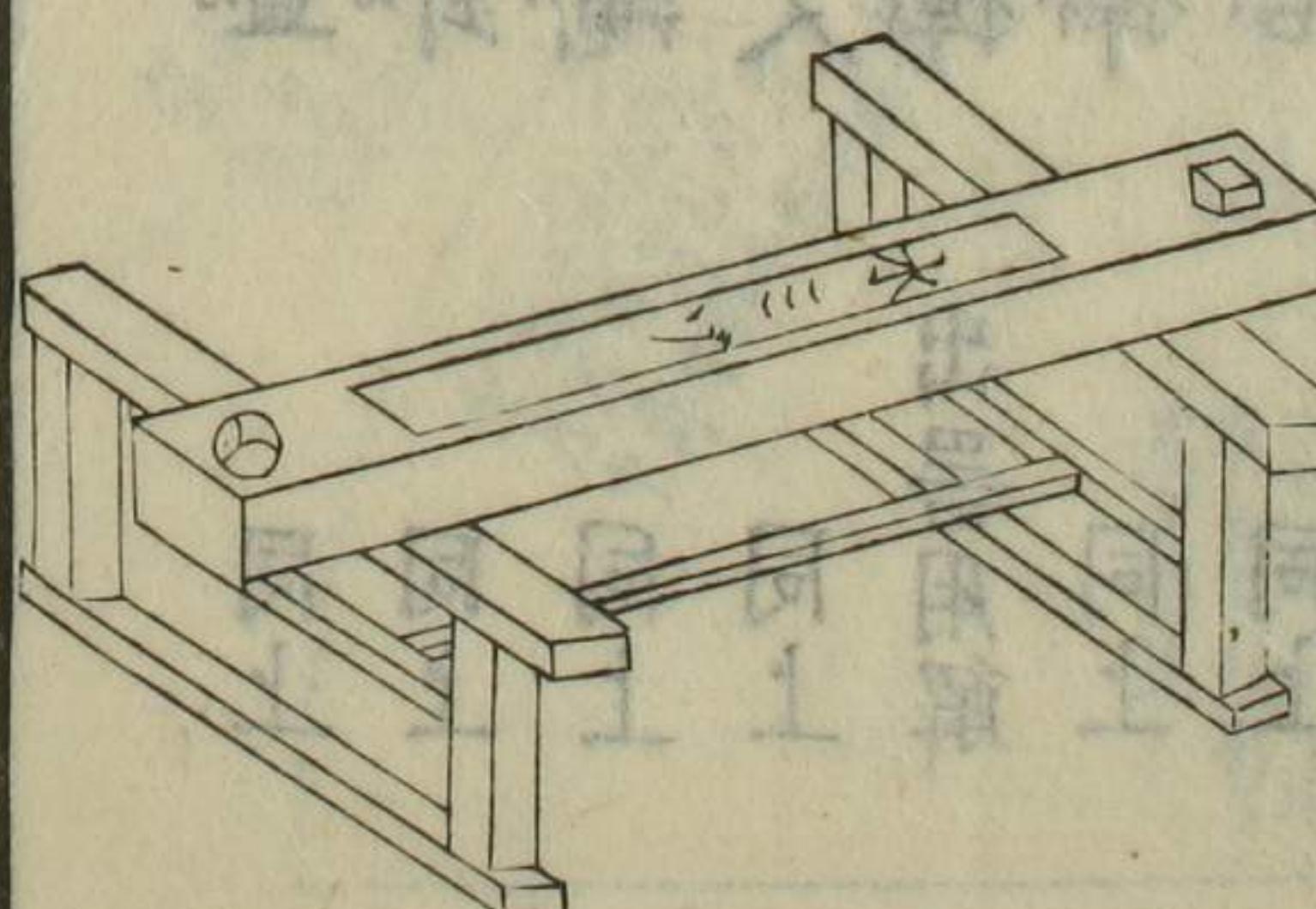
○收用器

此章出前件

○水溝

同上

水平の制角木と以て。長六尺横五寸ふ闊木の制し。表面ふ長四尺横三寸深さ一寸五分の水溝と穿ち前後ふ目當り。高五寸此水溝を盛るを。た水平木は下より臺と設けて。隨分不直なれど。臺小て上げ下げて方を極しき。臺の高さ好にくるべくとひとも大方高き



○水準

出于此章

二尺より二尺五寸を吉とす。委ハ圖を見て知るべ

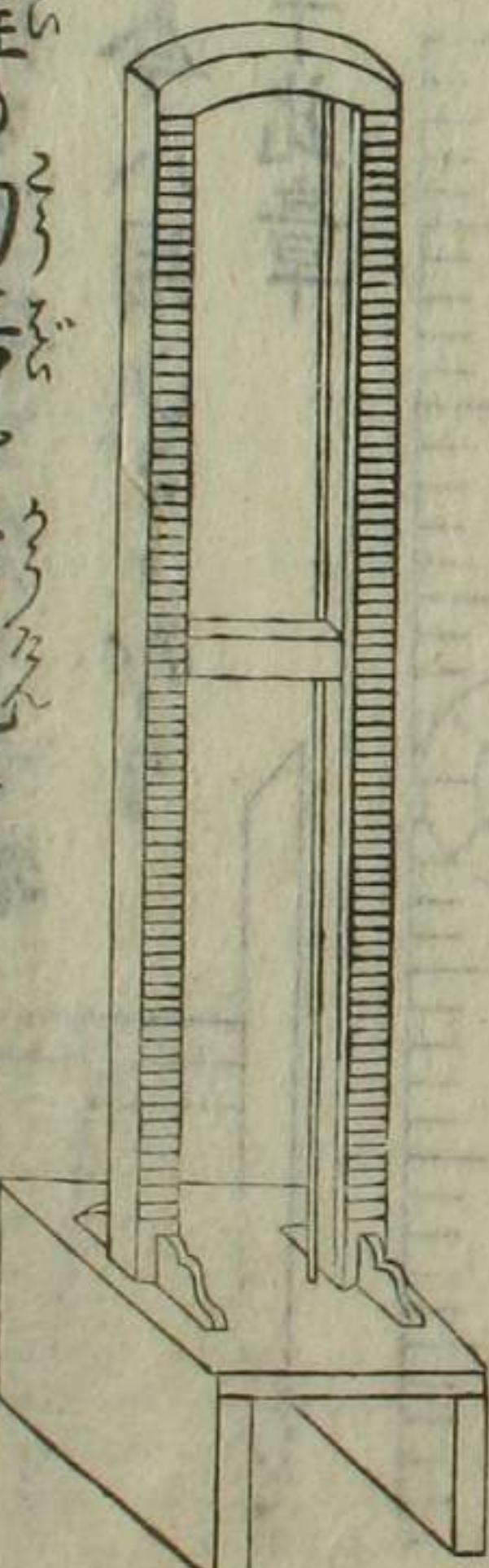
○水準 出于此章
水準の制長四尺横五寸厚さ四寸の臺木ふ高さ三尺方三寸の標木と立る。此標木と左右より助木と施して。斜邪なれど。標木に毎糸とたれき。委ハ圖を見て知るべ

○櫓 出于此章

櫓の制真鉤を以て

作る左右小曲尺の星

と計る高さ五寸元器の桁上ふ載て高程の勾倍を考見するの器なり。今專にこれを用ひ。委ハ圖を按して知るべ



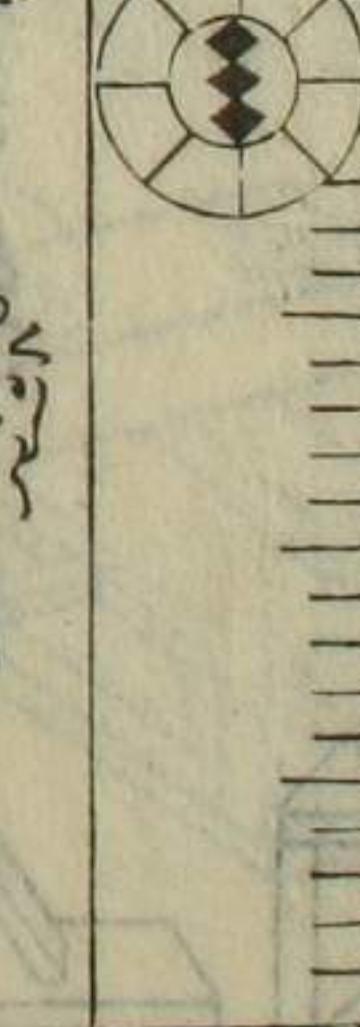
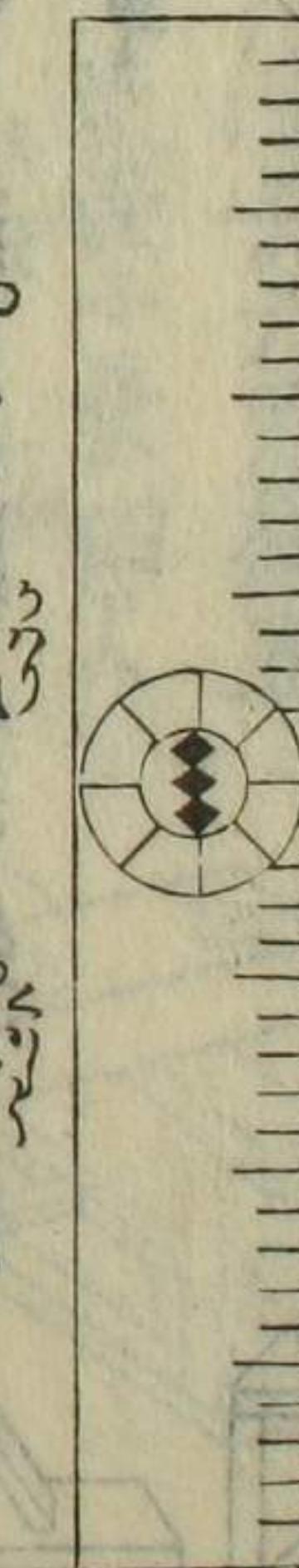
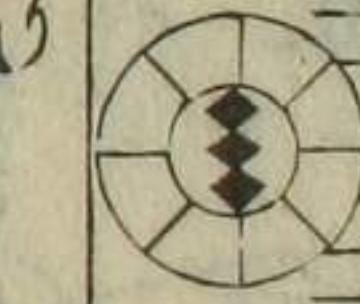
○ 滕

出于此章

滕の制真鍮を以て作る不安と定る器物
なり。不便利ゆえ今ハ用ひざるなり

○ 板定木 出于此章

板定木の制長一尺



五寸横二寸真中に

小丸を彫入る。元墨をも時ふ。元墨の代よ用ひ。委ハ図とぞ知べ

○ 種竿

○ 相圖櫛

右種竿相圖櫛二墨ハ國図の要用也。故に印可國図の傳ふを

量地指南後篇卷之一終

